

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

JAPAN

Tama

蝦夷風俗彙纂前編

五

ヲ 6
460
5



門ヨ呂⁶
號 460
卷 11

蝦夷風俗彙纂前編卷五目次 事

○奇談

上川郡總乙名ダウチシタロ

鮭の鱗にて火災を知る事

附 ツロ寄の事

才木シラ神の事

女夷より神通ふどいふ事

ホキナシリの事

蝦夷蘇生の事

怪物の事

海上怪物の事

山中異人の事

蝦夷氣吹の事

老狐鳥と化して飛去る事

○争亂

シヤムシヤイシ一揆の事

國後亂初發の事

厚岸の酋長蝦夷を殺害せし事

○音戰鬪の事

神輿風俗シヤラカムイ並トニの事

議論の事 卷五目次

境界論の事

シレノアイノ強談の事

○奇談童夷議論の稽古せし事

○上蝦夷人仇を忘きざる事

上蝦夷和人蝦夷と爭論の事

るも至てせづ打の事

蝦夷風俗彙纂前編卷五目次終

世界語の事

シノヘストハ異端の事

夷人沙摩忍良を名前

貴族紳商の著古する事

人間の事

物語の事

人間の事

物語の事

蝦夷風俗彙纂前編卷五

○奇談

○上川郡總乙名グウチンクロ

上川郡總乙名グウチンクロハ七十歳ふ近き老人はるぐ。至て壯健にして其質正直なり。去ル明治二年秋ニ當り。北海道北國郡を分ち。後志國小樽高嶋兩郡。及石狩國石狩郡。其他數郡諸藩等支配所を除く北國。皆開拓使管轄仰付られたり。石狩郡を舊兵部省所轄

となる。開拓使管内セ石狩川中央東ハ當別川を以て
境界セなし。對鷹より上川郡フ至ル。皆開拓使札幌本
廳管内セなる。然るふ古來狩物と稱セる。熊膽熊皮獺
皮等セ物産ハ多くハ上川空知兩郡土人セ獵獲セる
所セモのなり。

上川空知兩郡土人。毎年大陰曆七月より十月フ
至るまで舊來石狩役所へ雇役セラキ。其永川みな
らざる前フ。獵する所セモのを以て食料其他をと
一のへ川船にて其住所へ歸れり。其年十二月末或
ニ翌年は早春。山獵モ出て狩物を獲る處なり。故モ

其村落モ歸らざる前フ永川である時も越年モ喰
料運輸ならざるも勿論モして。年モより陸行モか
あモギ。自然石狩モ於て越年セなる時モ當人モ
ハ申モ及モビ。村落モ残り居る家族等モ困難一方
ならざるモヨモ。石狩役所官員爰モ注意して。永川
小ならざる前モ。土人賃金モ勘定を濟し。歸村モ申
渡したるモのなり。

然るモ明治二己巳年モ當モテ。何等モ事故モ有ルや。
聞所モよれば。空知上川兩郡土人モ。石狩役所小
於て越年致セ。引續て雇役する云々モリ。按モ

るに上川空知管轄違ひとなるを以てなるべし。
歸村申渡すの期を誤り。遷延の折めら。最早冰川となり。降雪甚しく例年の頃小ららず。土人ども石狩役所へ迫り歎願。漸く聞濟小なり勘定相濟。歸村申渡を請たる頃ハ十一月下旬よりて。雪いまだ堅くら。弱きものも。自身壹個の食料荷擔をるを得ざりきと。漸く雪を冒一歸村をなしたるとれけり。其後十二月中旬頃石狩役所。則兵部省より例年の通り狩物取纏めどして。番人壹名を派遣せしめ。開拓使並其他云々を今般開拓使札幌より來り。諸方開墾をなす小附て。開

拓使より取纏めのため。出張をるも此のるも計を
びたし。さきども狩物をことぐく。從前の通り石
狩役所へ納むべし。且明春よりハ其村落を引拂ひ
銘々全戸を携へ。當別を擧て川下へ轉居をべし。用
ひざるものも撫育ハ勿論。石狩川ふ於て鮭漁を停
止をる云々なりと。

相違たりと。上川空知の土人一同。何の事故なるや了
解せざれども。兎角其意ふ隨ふの形勢あるふ。獨タウ
チンク口憤然として肯せざ曰く。古來志をく管轄
替小なるといへども。

松前より御領となり。まと御領より松前領となり。
今また御領となるをいふ。

未だ斯比ひとき御達のるをきうべ。今般小限り何ぞ
や。且まと獨番人のいふ所のえをきく。其可否答へば
たゞ。是より直よ石狩へ趣き。役所よりて確乎たる情
實を伺ひ。まと思ふ處をも述べ。然る後いよ／＼當別
を擧て。川下へ轉居いたさゞれば。石狩川の鮭漁停止
をとあらば。我思慮する處あるのこと。

今通称石狩土人となり居るといへども。上川土人
を元來沙流郡の土人小一て。昔是より移住したるも

のあり。開拓使の来るにつき。此地居住する事の叶
たざれば。古へのごとく沙流郡北川上へ轉居をべ
し。今是の墳墓の地ある當別を。容易よ川下へ轉居
せんやと。

外小役土人内三名ど都合四人連再ひ雪と冒一至
急

急ぎ往復せざき。其山獵小出る期を誤り。且其内
開拓使よりも官吏出張小ならば。不都合の件生せ
んも計りがこと。急たるなり。

石狩役所よりて。前顯の情實悉く應接よ及ぶ處。

此應接の事情。後日ふ聞所ふよれば。兵部省石狩役所ふ於て。答ふる小當惑甚と困却せど云。後日詮議の上何分相違をべく間。夫迄も從前の通心得べき旨。御達を請たると雖ども。尚自ら安トびたき事情尋問の爲。歸途發寒村へ立寄乙名コマンダの家ふ至り。

此秋小當アテや。發寒村の土人其村落み歸り居る。是輩も前ふ上川の如く。石狩役所の達を請け。皆石狩ヘどどあり。十二月上旬ふ至るといへども。歸村をるものなし。其頃我輩ハ御用ふ付命を請け發寒

元村小泊り。兼て札幌より達セ旨もあれど。日々土人の歸村をまち。志モノノ土人村落を見廻る。小壹人も歸リ来るものなし。或日午後二時頃。琴似村土人又市比家小至る。又市ハ不在男女土人貳名居る。我輩ハ直ふ戸内小入りを。女土人ハ戸外ふ出行き。其まゝ歸リ來らぞ。而して我輩ハ其居る處の土人よ向ひ。又市比ことを尋ねたる。言語通せざるや黙一て答へば。然りと雖ども今是ふ日頃待所の土人よ逢て。御達の趣意を諭さぞして。是日空一く歸る事遺憾且自禁せど。顧ふ小石狩地方の土人

たるや少しく語の通せざるものなゐるべきと。故
よりたく今迄爰よ來たる事數十日なり。來る毎よ
門戸を鎖一人影更小見えぬ。今日をしてヤニよ
逢ふ事を得甚悦ぶ。我輩ハ當時札幌より開拓使
判官殿の命を請けて當發寒元村より居る者なり。今
般開拓使の此地へ下向せるや。土地をひらき人民
栽培育て。大ふ蕃殖ならしめ。惡をこらへ善ふ導き
民心を一て。れひく開化ふ趣うむ所爲なり。
第一土人比如きも別にて厚き御賑恤比御仕法を。
立させらるべき御趣意なり。發寒村を則札幌の管

内なるが故。土人歸り來ると待ちオムシヤをいた
させ。夫々御手當等も賜るべし。且向後を札幌より
於て万事厚く御世話成下さるべき筈なり。札幌より
かひても通辯するものをかうぞ。

土人を凡て通辯を厭ふが故不。我輩態と之を云ふなり。

附て又市ハ若年の頃。數年石狩へ行。荒井金助より隨
從し。言語其他常人より異なる事なし。又聞所より
れば何等の故なるや。石狩役所の達を請。石狩近傍
へ轉居するとの噂あり。區々の浮説を信じ。後日悔

を致を勿れ。當時札幌より居る開拓使判官殿といふ
者。舊箱館奉行と云ひ如くして。其位官尚重し。石狩
小樽高嶋を除の外。壽都より濱益より至る。皆札幌の
管内なり。上川空知兩郡の如きまと然り。開拓使の
官員も兵部省の官員も。皆同じく朝廷の官吏なり。
而して開拓使といふを。此國を總轄する廳の名義
なり。必しも是を捨て彼所より轉居するなれど。前
小も伸ふるべ如く。札幌より通辯を置ざる故。今我
輩語る處の情件も。又市小泊らざれば。貫徹して外
土人へも傳達せしむるものなし。と故より市より面

會にて此情實を説諭し。外土人へ傳達せしめ。後日
悔悟なうらめむと。ヤニ今我輩述ぶる處の情
件。語の通ずる處泊らば又市より通ぜよ。今既より日没
小至らんと。歸きてまと明朝こゝより来るべしと。
彼土人より禮にて戸外より出づ。爰より吾人より隨行
たる杣夫の曰く。彼土人ハ石狩地方のものよりら
む。東部長万部邊の土人なりと語るをきく。吾人再
び戸内より入。彼土人より曰く。今隨行したる杣夫の語
る處によれば。ヤニハ長万部邊の土人なるよし。東
部土人より。先年より言語として通ぜざるなし。ヤ

ニ必遠慮するなれと。この時より當てや彼土人
笑みを含み。番人語を以て礼を以て答ふる。今語
る處ことゞくく了會せり。我きハ戸主又市小雇え
れ居るもの。又市ハこよひ遅くなるとも必歸宅を
る筈なり。歸り來らば其旨申聞すべーといふ。然ら
ば又市の歸り來らば。尚面會の上情實を説諭をべ
き間。明日早朝發寒村の派出所まで來り呉べーと
傳へらきよと申置き。速より此旨同僚より申聞たり。此
土人のをなしよも。今日歸り來るものも。一両日中
よ此琴似村を引拂ひ。石狩近傍へ轉居をる手配の

爲なりといふ。翌日早朝より至り。又市なるもの來る
を以て面會の上。前件比情實懇々説諭したる。悉
く了解大小感服を。依て又市云々をもたせ。札幌表
判官殿の許より出を。判官殿厚くこれを諭す。自ら酒
肴其外賜物あり。又市悦び歸る。夫より又市をして。
石狩近傍へ派遣せしめ。發寒村酋長コマンダ。其外
る。則又市の一效なり。其後發寒村よりオムシヤ
土人春秋の祭りにてこれを砾の祭りなり
阿モ酒其外賜物例年より三倍を。一同の土人意外小

て悦ぶ事限なし。此翌日上川の土人。タウチシクロ
始め。外三人のもの發寒村へ立寄り。前日の餘酒等
馳走ふなり。實況を見聞一始て安堵の思ひとな
て。歸郡一たりといふ。是即ち明治二己巳年十二月
の末なり。翌庚午年春吾人上川郡より至り。開拓使管
轄且狩物等の云々説諭の際。少の異論もなく速く
奉戴せり。是則上川乙名タウチシクロの效なり。
札幌の事情並實地の形勢を熟見。然る後翌午年一
月上旬歸郡せりといふ。

按する小前きよ石狩役所より。番人をして上川郡

へ派遣せしめ。石狩近傍へ轉居等云々を達せしめ
たる秋より當りて。上川郡乙名タウチシクロなればせ
む。發寒村土人と同一ふして。荷擔皆石狩近傍へ移
轉するの心底ならむものをタウチシクロ獨り憤
然として服せぞ。奮て之を討論せしより。一同の
土人も。石狩近傍へ轉居等云々の達を拒みたりと。
上川郡乙名タウチシクロハ野蠻の土人なりとい
へども。吾輩も日々應接彼の云ふ處を聞くよ。大義
名分の正しくして。常人の及ばざる處のもれり。
また吾輩上川郡よりあるや糧食欠乏一日々一合の

粥を喫するより至る。且川々所々冰解よつき歸郡を
るを得ぞして。諸方見分未だ究めぞ。進退爰よ窮を。
仍てタウチソクロ語るより是の情を以てモ。タウ
チソクロ曰く。憂ふるなみれ土人の食するも比を
食をれば。必ず飢渴をることなし。万一是地より
官員をして飢渴せしめなバ。上川郡の土人一同何
を以て天下ふたん。舊冬歸郡遷延したるより。
此地も糧食乏しといへども。土人を二食を一食よ
りても。うならば官員を乏しからしめず。いさゝ
食料小懸念なく。諸方見分致きるべーといふ。あ

小於て糧食れ事も。タウチソクロ小托たり。土人
の糧といふハ。多くハ俗より鰐と云。

生鮭を干乾したるものなり。之れを二三日川水
より浸し。おき。少しくやいらりなるを。おまやうふ
切きり。これと水みて烹る。昆布などを入れて食を
るなり。

是を以て吾輩ハ纏よ乏しのらざるを得て。恙なく
歸郡の上。實地は形勢を異状せ。土人を野蠻比俗
なりといへども。仁を以て接をれば。彼もまた仁を
以てモ。義を以てすれば。彼も義を以てモ。何んぞ常

人ふ異なる事はらんや。上川見聞奇談

○鮭の鱗よて火災をある事

附り口寄の事

東遊記。夷人不思議なる事ハ。川比両邊よ立置たる居小屋。小焼亡よても有時ハ。鮭は鱗小焦げたる跡付たる。其左右の鱗を見て左側よ火災有。右側よ火災何りといふ事あるといふ。またシカベと称する黒き大鳥。春ハ海邊よ来る。此鳥と鷗多きを見て。鮭漁の多少を占ふと云。

渡島筆記。トシウといふト占ふて。何やらん法を修

毛るまねにて。忽人をあらざるづ如く。狂せるがびとくよじてことをいふ。和俗ふくちよせなどいへるものゝ類よ似たり。いふ處果して驗かることあり。千島志料

○オホシラ神の事

蝦夷ふをオホシラ神といふ物有。何の神といふ其由來をあきるものなし。來比木の尺余ある木。かぶろけよ全體を彫る男女の二神有。信心のもの祈る事ありと乞へば。其木偶神を擁へ來りて。猪木綿の裁キレを願主より出さしめて。神體を包み。左右よ持て呪咀。其神女

巫ふ懸りて。吉凶といふ事なりと。傍ふ人云つて何の靈なるう。虚妄の事ならんあと思ふこと云きば。我ど斯いや一むなどいふ。故よ神靈冥通をと。恐れ渴仰あけるよ。怪しき事なり。中國み在る處は犬神といふものよひと一き。松前記

○女夷よ神通ふといふ事

渡島筆記よ。蛇田のテコランといふ蝦夷アヌヌが女クンネシリグ年をや既ふ婿となるべくして。獨居きバ郷人の小と問ふもの有。テコランされば我もさ思ふなれど。我等ガ所へを神カミが來り通ひ給ふなれば。せむをべ

なりといひ一グ。次第よ病ケレるづ如く。つアカルタたるさまなり。不思議なりといふうち。来るものを止て来らざりけるほど。小クンネシリグ同所のケレバタル。といふもの、妻となりて存在を海濱シマヘにまくらる事小て。神來ること或も一二月半年をのぞふにてやむ。一年とも来る事かなきことのよ。千島志料

○ボキナシリの事

東夷周覽稿よ。釧路小シコエニカクルといふ夷人云り。日本比言ふ通小て能和語を解む。彼が話よトスムシといへるもの。或日西別比邊シマヘ至り。西別比橋を渡

らむとせり。向ふより外套を着たる夷人來リトク
た。ふトギの事よ思ひ。互小近く歩行よれば。彼夷トス
ムシニ對して云やう。汝ボキナシリ。

ボキナシリハ。死て行先といふ義。下のライタルヒ
ハ。死人のあとなり。

ヘ我と共に至らんやと。トスマシ驚きて云。吾子ハ如
何なる人なるみや。ボキナシリを吾儕グ至るべき處
ヨムラモ。と一向ヒタスラム辞一けレバ。彼夷人云。我ハライタ
ルなり。汝を伴ふべきゆゑられバ。我と共に来るべし。
セトスマシも始終たゞ夢の心地みて。眼を閑て隨ひ

行よ。深林茂樹寂々として。白晝といへどもさなづら
暗夜の如き深山へ伴ひ行。大樹比枝よ縛トク。彼夷人忽
然とトて見えむなりぬと。トスマシも甚恐懼トク。縛トク
のぎきんとそれども。なすべきやうあく。其儘一夜を
送りければ。翌朝より夷人大勢尋ね來り。此體を見て
て大不驚き。縛トクを解きて其譯を問へば。トスマシ然る
所以を答ふ。多くの夷人驚き懼きて歸るといふ。昔
より此西別山をバ。ボキナシリとて甚恐き絶て至ら
ざマーユ。まゝて此奇怪を見て今ふ至て甚懼る事。
神より甚一といふ。同上

○蝦夷人蘇生の事

宗谷ハ蝦夷の乙名オタトモクルといふもの。唐太嶋ヘ四ヶ年前年年六月ハ渡アリよ。西の方マツラシナイと。ウエニとの間ヨて病死セリ由。其弟カスモユレといふも従ヒ來リよ。東地ハ方ヨ行ヘ故其場ハあらび。唐太の蝦夷惣ハ風儀ヨて死去セリ。先シ七日モ平日ハ通り座セリ。酒魚杯ハ備ヘ。近隣のものを振舞ス。生時の如く坐シめ置き。其上ヨ寄木などを積覆フ。箱ヨも彫物杯も有ルよ。宗谷の乙名ハ事なきば。唐太蝦夷人

共丁寧ハ其通りヨせ一處ト。十四日目ハ蘇生ト元の如くヨなり。宗谷ヘ恙なく歸リ。當時ハ宗谷の乙名を勤め居ルよ。少シ氣の抜けたる様ヨ成タる計りム。其餘をもとヨ違フ事アリと云。休明光記附記

○怪物の事

渡島筆記ヨ。四五年前キムンケトウトイふ大沼の所ハる邊ヲ。ツクツシトイふ所ハ。夜々怪物アリ其形大男子ヨー。人を見レバ眼を張テふらむ。謂マる見ニ入道の類アリ。是ヨ何シもの或ハ發狂ト或ハ卒倒ス。もとモ居宅十二三アリ處ある。これがため

よ今纔小三戸よ成たり。シコツと云處のマウシヤン
と云もの。去年此事を熊次郎よ語りとぞ。千島志料

○海上怪物の事

渡島筆記。喜右衛門が濱益よ居たり一時。夏の夕海
面なぎひとりて玉盆の如し。興たりければ窓より望
居たりし。七八町も隔たらむと思ふ海中。小き黒
き物あこり。風もあきふ陸の方へ走り来る事箭の如
し。其両邊の潮皆このれたり。忽岸よ至り浪の打よせ
たる砂堆をもして。長堤也如くありて。草生たるをも
削至たるやうよ開き。草木も猶更左右へふせ。山の方

へ走り行たり。海中よ有一時ハ黒く見え一ヶ。陸へ登
りてをたゞ風よ一て。目よきへざるものか。其ふる
まいを見き。物有ぶ如し。海を走る時々潮吹まくら
れて。圓小形をなすことよいりし。いのなる物たること
とを志らば。此時暑きまゝ。小蝦夷の童よ水を汲ませ
小やりたり。一人も水をくみて先だち。一人ハ急
りて暫くおくれたり。其間凡百歩をのり隔りたらむ
と見えし。のれ怪物のきらよ觸やせんと心を冷した
りしが。幸よ一て二人が間を過行て恙なし。これを見
たる蝦夷が妻なども皆戸よ立。鎌を持って怪物の来る

方よ向ひ。擊まねーてヤアくと聲を叫ぐ。モべて怪物を見れば。いつもかくそることのよー。此等をモニシヲカムイと。風中よ鬼物有りと見るの意なり。同上

○山中異人の事

渡島筆記。文化五年より十二年前。宮前のチヤシントといふ老人。いろいろ。車櫂の材をとらむとてコタシベツの山中よ入て。異人を見る二人有り。トンドと來リ。一毛をさりたるもの負。女子一人前よ立て。獸皮比毛をさりたるもの負。女子一人前よ立て。其女子走りてチヤンドゲ前よ來り。我ハシラヌカの某比女あり。往よかの二人よ掠らき。山よ

のミ住て出る事。何たも。今二人が來りて君よむろひ。海濱よシヤモ^{日本入}。何とやと問ふこと。何らば。多くいろど答給へ。且家よ歸り給ひ。シヤラネフ。シヤキリ小懸て宅の前よ立給へと教ふ。シヤラネフハ皮よて造りたる袋あり。夷人が常小物を盛て負擔をる處あり。シヤキリ。此方よていふ丸太なり。シラヌカラ西濱よ。地名。女子が父比名。語ミー者忘れたりといひき。前よ女子故かくして行方をきざり一事。皆有モー事なし。女子らかくいひ終り歸りて。二人よ就て何やらもさくやき。二人またいひ一事。何れど

も。其間隔にて子細よ聞えべ。只終ふア井又キツペウ
ベとも。養たる熊の膽といふ事あれども。キツくの語
夷人の解せざるところあり。チヤシンド懼れてモ
マジ。二人もまとかくいひやみて去る。深草の裏と
行。纏よ頭のみ見えて。其疾事いゝなる疾走の者とい
へども及べきよ物らぞ。流潦の處をも涉り越ゆと
も見えべ。正よ鳥の翔る小ことならぞ。チヤシンド急
ぎ家よ歸り。女子の教の如く。こきニシヲカムイを
らむといふ。カムイも神ありニシヲモ魑魅の類をべ
て惡鬼の名なり。是より前國後は蝦夷乱をなし。松前

小て貳拾七人の首を斬をる事例り。其時の擒を厚
岸まで引來モ一ヶ糧乏トキふ流き。そきらう中徒罪
のもの二人。濱邊より魚を捕セト。道て歸らざり
しづ。若の比貳人山よかくれ居たるものある。あら
らば彼も人を恐きて山よ入ーを。チヤシンドをさま
ーと思ふ心のら。飛行をる如く覺えーもあるべのら
ぞ。但異人よ一て異話をあー。且女子が教る處又異あ
ズ。異事といふて可なり。又東邊の室蘭よ。シヤウチク
といふもの。三四年前獨漁艇よ乗て海よ出ー。何方
よりの美婦人舟よ入り。交モ一より家小かへりて

後も志を／＼來り。必信宿一て去る。かゝること既久。人これをみぞ。シャウチク疾なく一て形神憔悴。もる故。竊々疑ふものあり。同郷の一女またひとり海よ浮て。美丈夫よ逢一ヶ。それより女子が家よ忍ひ通ふこと。シャウチクコノゴロ事と同ト。ある時シャウチクコノゴロ宅よ。友人多く集飲を。主人常よハ心中小秘せ一ことなるが。此時大よ醉。友人よ向戯て己オレもどへ久しく訪來る佳賓カヒンあり。美艶いふべらばといへども近づく頗厭ふ。公等よ譲り與んと欲をいうふといふ。一人我幸よ得むことを希ふ。その美人何國よ在やと問。シ

ヤウチク笑て。則座中よ何りといふ。坐客シテや一のみもどむきども見る事か。これよりて初ておもふ。シャウチクコノゴロ狂ヨハをる如く。人も何らぬよ言笑をることあど有リ。是妖かる事をきとりけ。此より後の美女子と云もの。再來らぞ。志のミあらば。かの女子ガ所へ來り。丈夫も絶ておどづれやミたり。女子ガ名を語るもの忘メたり。シャウチクコノゴロも女子ガも今ふ存在を。海獸の妖。好て人と交るかどいふ説ハレバ。海豹海獺の類。うるこざハラカをなせ。よや何らむ。同上

○蝦夷氣吹の事

往古蝦夷ハシニ中ミ。口より氣を吹出スルて。忽ハ霧ミストをなメそ術ノウを行ふものアリきといふ。

藤原為家卿ハシニ歌ウタ。こチふアを曇ムカシりもぞアリる道ノくルは蝦夷ハシニ見セ。そ秋ハの夜ハ月ハ。とよめル。此霧ハ城起スル。おカふクといひならハる。蝦夷ハシ語ハシをつウへルなりといへり。

隱形ヒンキョウの道ノといふハ。後世此術ノウを傳スルへたル者ノと聞ク。中近世此蝦夷ハシ風土記ハシ云ク。戰鬪センブ之事ノ。多シ用スル夜ハ攻ム出スル敵ハ不意ハシ。蝦脩ハシ妖術ハシ者ノ。潛行スル入ル敵ハ中ハ能シ令人ハシ不覺ハシ。といへるハ俚語ハシ云ク。忍スル術ノウみて隱形ヒンキョウの類ノなるべル。未曾有記卷三曰ク。須臾ハシふ烟

霧ミスト輿ハシ中ミ入ル。咫尺ハシを辨スル。公超ハシが五里霧ミストを起スルと疑スルふといへるハ。蝦夷ハシニ東ハシ地ハシ左留川邊ハシにてハシ事アリ。此公超ハシ後漢ハシ張楷字公超ハシといふハなり。又同じ傳ハシへル公遠ハシと云ク者ノ有ス。公遠ハシも何世ハシの人ハシあるハシ考スルふべきハシよリ。内地ハシよリ渡スル者ノ一ハシ者ノ。然ハシる妖術ハシをなメをも有スけム。或ハシハ罪科ハシよりハシて。此地ハシよリ逐放スルきル類ノやハシらむ。侍所沙汰篇ハシ小鎌倉將軍家ハシ執權北條恭時ハシより。文暦二年七月侍所ハシ下スル状ハシ云ク。犯人斷罪ハシ上ハシ可ス召スル進スル閑東ハシ可ス被スル流シ遣スル夷ハシ嶋ハシ也ハシ。とあるハシ京師ハシの邊ハシにて召捕スルたル惡徒ハシを鎌倉ハシ召下スル。夷ハシ嶋ハシよリ流スル遣スルをといふハシて。蝦

夷國より罪人を流遣を事有けるをあらるき。それ等
が類ふもやらるべらるむ。侍所沙汰篇より夷島と云る
蝦夷と定たる。東鑑卷九曰。文治五年九月三日恭衡
差夷狄島^{エツカシミ。}赴糟部郡^{モロコシ}と云るを證とぞべし。同上

○老狐鳥と化して飛去る事

蝦夷奥地斜里と云處也。夷地東西の分境にて。近頃足
輕木村萬作といへる者。右場所漁場働く吟味より遣
ける。同所の藏比上よ。老狐遊びより來りて折々睡居
る故。右足輕鉄炮より打たんとぞる。夷人ども此狐
へ年古く靈れり。神と申傳へたれバ。打取事宜うらを

と達て留むれども。きびぞりて祐らひ打ふ。ある
小火縄は火うちらぞ立消し。かゝる事兩度より及びけ
れば。いよ／＼憤り。ある日狐のよく寐入たるを伺ひ。
近々と寄てうちければ。孤くる／＼と藏比屋の上城
まろぶとひと／＼。忽然と一て鳥よ化一飛しよ。右
足輕此時より甚懼き。其夜より戸外へも出ぞ身の
毛も立。おそろ／＼覺るよ。夫より段々と右のも比
仕合宜うらぞ。夷地の掛りも子細よりて取放され。ま
／＼鍊炮より鳥を打とて玉それで。板垣傳太と云
者を打。既より下死人となるまで。苦勞をせしものも。

王疵淺ければまづ無難よ過たり。これ全く狐比祟り
と云り。證有世話

○争亂

シャムシャイン一揆の事

寛文十庚戌年。松前志摩守矩廣十一歳よ一て兵庫と
称せ一時。東蝦夷地方深退ミタナリと云所よ。シャムシャイン
といふもの有。又シヤラセンともいふ。此者長高く一
て骨太く膂力人よ勝れ。蝦夷人ども大きよ恐れて。嶋
嶋殘らば其手下に付隨ひけるよ。深退川を前みにて
城を構へ居住せ。其頃此邊の山よ金鑛有て。日本人

常々往通ひ金堀共大勢集りたりし。中よ出羽國仙北
より叢りたる庄太夫と云金堀。シヤラセンク賛とな
り。渠よ一味し松前家を討亡。諸國通路の商船を己
等が心せ儘よせんと企たり。又同時才ニヒシと云蝦
夷人アリ。一名オニベともいふ。此ものハイと云所よ
り出て。其長高く力量も人よ越え。輕捷比術を得て。巖
石をも傳ひ高き所をもかどり越る事。徧よ飛鳥の如
し。此ハイと云所。昔義經此島よ渡らきし時よ居住
此所なり。此所より出るものを。そべてハイタルとい
ふ。タルとハ衆と云詞よて。江戸衆などいふが如し。

オニヒシも此所より出しゆゑよ。松前家よもろざし深く更小別心なきゆゑ。シヤラセンゲ所行を見て。其振舞傍若無人甚以奇怪なり。かきをそのまゝさしゆうむ。國中の騒動止事有まじ。我等間近く有なづら見捨てむなし。く過つる。油斷とやいをん。不忠とやらせん。何とぞして我一分比力を以て。他をからだ討取るべし。たゞへ彼ゲ手下何百人ありとも。何程の事や有べきと存定め。内々よ其用意をせし。シヤラセン是を傳へ聞て。慮外なるオニベゲ企。奇怪なりとて。是も人數を催して。いどみ戦ふ事度々小れよべども。互

小勝負決せばして月日を送る。彼染退川近傍の金堀共貳百人許もほゞしげ。此頭分を文四郎と云て。百間四方比土手を築立其内よ居住を。此屋敷シヤラセング城の下よて。染退川を隔たる許なり。此川幅百間餘よして常よ舟渡しなり。通詞勘四郎廿戈許の時。松前より用事有て。文四郎方へ罷越て用事調ふる。其頃オニベモ。彼金堀屋敷より三里程脇よ要害を構へ居住し。シヤラセンを輕んじて。曰本人よむほまじき心を見せんとて。供人壹人召連れ彼文四郎ゲ居宅へ來れり。シヤラセン城の上より是を見をまし。天比與へ

と悦びて貳百許りの人数を卒し。染退川を押渡して。
金堀屋敷を押取まきていふ様ハ。オニベ今此内より來
れり早々是へ出をべし。左もなくバ壹人も残らば。此
屋敷を焼討みせんとぞよばハリける。此時内小を文
四郎と通詞の勘右衛門。其外拾四五人ならでもなし。
オニベ文四郎より向ひていふやうハ。運比極め是非も
なし。我等壹人より大勢を損せん事不忠也至りなり。
鎗壹本かし給へ。彼グ軍たとへ何百人いるとも。たゞ
毛く切ぬけ申べし。必氣遣ひ一給ふなど云て。文四郎
が持鎗を借り。柄八尺をうりよ切。布子を以て頭をつ

つみ。母衣れ様よし走り出んとせしクバ。シヤラセシング
人数大聲を揚げて。オニベ此所へ来よし時も手振り
なり。刃物を借して出ししあを燒責ふせんと呼ると。オ
ニベ聞て尤なりとて鎗を投捨。樋比木刀を手よ持家
來をバ不便なれバ隠してたべとて文四郎より頬置き。
扱オニベ大木槌カケヤを以て。家れたりをあゝたり。二
ツ三ツ打てバ寄手のを此所より出るぞと心得て
かけ集モたるその間よ。外れ所を押開きうけ出し。元
來輕業比大力なれバ。大勢の中を飛び越えを称越。五
六丁程のけぬけたをし。敵の方より投突小突たを

し鎗の足の小むら小たちければ。大勢を相手小せし
勧小。手負ひ草卧たるまゝ一町程行て倒きたり。され
ども初より比働きシテ恐れて。敵アシにさりへ寄付か称遠
矢許半時程射うけて。其後死したりと見て。大勢寄て
首を取る。此間ヨ文四郎ミツラもオニベオニベ頼リ置たる下人
を長持ロング隠し置たりしを。シヤラセング人数大勢押
入り。先達オニベ來キし時ヨ。下人壹人召連たりと
て。天井の上椽の下までも殘る所なくざガシとれど
も見えば。歸らんとせし時其中壹人又立歸り。此長持
こそ心元なけミ。とて蓋カバを取のけ見出し。引立てシヤ

ラセング前小行く定て殺をらんと思ひの外小。シヤ
ラセングいふやうきやつぢらシタ類ヒ何十人を殺し
たる共何の益なし。追放せよとて出しける。是も正徳
元當寅年より四十二年以前。寛文九年也事より其
年の八月。松前家比家來並商人共。例の如く船をあつ
らひ。六十艘許の内三十艘許彼地へ着いなや。シヤラ
セング手下比蝦夷エビイとも大勢出合。當年ハ殊外肴諸色
多し。代物をきいゝ程シテ御望マウセ出すべし。
とれもひくシテ船中の商物を取り行き大方よ運び仕
廻たる後夜中忍び入り寐首スヌコを搔き。三十艘の人数四

百人許殺されたり。其夜僅小四五人が陸地より
おりさぬを替て。翌年比五月松前へ罷り。夫より前
四月の頃よ松前へ注進。松前家老佐藤權左衛門
を始て此様子聞届け。同月江戸へ通詞を差添注進せ
り。依て五月江戸より松前八左衛門上意を蒙下向を。
あれよと以前よ志摩守家来蛎崎作左衛門人数三百
計召連無事を入きんぐため蝦夷地へ下るよ海上心
まのせばして日数を経る中。シヤラセング手下れもの
二千許。シチリチヤマエソなどを大將よして。クンヌ
イ迄登る。依て作左衛門クンヌイよ城を構へ櫓を揚。

クンヌイ比金堀共を相添。五百許比人数よて支へ此
由松前へ聞えしりを。佐藤權左衛門其勢百二拾人。松
前儀左衛門其勢百五拾人。仁井田瀬兵衛其勢百三拾
人。其跡ふ惣大將八左衛門追々ふクンヌイへ馳付。作
左衛門人數と合せて千人余よて。クンヌイ比城を守
る。シヤラセング者ども彼城を焼責ふせんと巧みけ
れども。其防き堅固なるゆゑ叶えじ。依てクンヌイ川
を隔て戦ふ。此川幅六七間比小川よて。味方比勢鉄
炮貳百挺許。表ふ並へ透間もなく打出したきば。蝦夷
人計打たふされ。是よ肝を消し皆引色よ見えしげ。彼

等も鎗を持。又ハ半弓より毒矢を頻々射付とりしり
ども甲冑堅固あきバ事ともせば。金堀共ハ皆着込を
着たれば一本も通らば。朝よア晝まで戦ひけれども。
鉄炮より打立られ不叶して山中へ逃籠り。打倒されし
ものをも其死骸よく引取隠したり。依之城中静小兵
糧をつうひ川を渡りて面々敵を追ひのけある。此時
先押蛎崎作左衛門。二番松前儀左衛門。三番仁井田瀬
兵衛。四番佐藤權左衛門。五番惣大將松前八郎左衛門。
押掛らきたり。權左衛門ハ其時年七十四五年にして
威嚴ありし人品なり。クンヌイより八九里程奥ハモ

ウベツ比内。シツカリといふ山へ敵逃籠ヨシゆゑ。一
段より五段迄段々備を進め。先勢より相圖比貝を吹
立く。惣勢一同弓鉄炮を止め。鎗を以て濱邊より
繰り出し。悉く討取らんと示し合せ。山に腰を押廻り
責上りたる處。此山中小シツカリ川といふ川あり。
此川へ彼蝦夷の奴原。海獸などの飛入如く。飛入く
水中をくづみて川傳ふ逃去り。敵壹人も見えば。其山
比下り口みて逃残りたる夷ども纏は拾六人。大將八
左衛門手よ搦捕一處。權左衛門見ていへるを。我等一
ツ謀計のをば。此生捕を我等小御預けられと云々。

八左衛門承諾せし。故權左衛門彼生捕は繩を悉く解き。おのき等命惜しくバ。敵地案内仕きと申けきバ。一議よも及ばず畏候と申。依之先小押立案内致させたる小猶山深く進み行く。モウベツれうちオシヤマンベと云所より河あり。舟をも残らず川向より引付け。蝦夷は頭四五十人程。惣人數千人許よりひくへたり。權左衛門是を見て通事ハ勘左衛門より鉄炮を持せ。小高き岩の上小うけ上らせ。高聲より呼をりけるを。おのれら狐狸は属みて勿体なくも松前家へ敵對申さんとぞ。依て江戸より松前八左衛門殿を大將として。大勢是

まで指下されたり。

大軍江戸よりハ来りしよあらざれとも謀計の虚聲なり。

れのれら如き、髪鬚の有奴原をバ。火より水より入れても壹人も残さじ。子々孫々まで根葉を斷て討取べし。とてむくハせ給ふぞ。されども我等餘りみ不便小れもふ間。若惡心を改め降參仕ものからバ。命計りをバ申助けて得さそべし。最前生捕し奴原も首を刎べきをも預り置ぬ。かくいへども猶も敵對せんと思ふならば。己等が放つ處比一矢。人間より立り姿を射よど大

肌抜小成て。胸をたぐひて呼をきしきバ。夷ども初の日本人の働きよおどろき。又大勢よ驚きて。一言よ及バぞ。鎧をぬき。刀をも打捨。頭分けえぞ四十人。舟貳艘よ取乗せて降參せり。權左衛門此者共よ打向ひ。能々惡心をひるがへし降參する上も。何分よ我等申などめ得さばしとて。此旨を大將へ申上し處。八左衛門大きよ權左衛門を褒賞せられ。此上ハ川向へ。我等向ハんと。八左門いたるよ付。權左衛門ハ手勢五六十人比生捕を引連。クシヌイへ歸りし。此途中よりいつくより廻りけん。彼同類比夷人三百人許前後よ

取まき。時の聲を上る。權左衛門聞て小さき奴原あふとて。又小高き所へのけ上り。去ともなき奴原我を見知らさる。佐藤權左衛門生捕を召連て。歸る道を妨るぞと呼玉し。バ。一矢とも射る事叶ハぞして平伏して通しける。暮ヨ及びて城ヨ入ア堅固ヨ守る。蝦夷人ハ昼時一食の上時ヨよりて五六日も無食ふても。さして苦ヨもいたさぬなり。日本人を此取合よ食事比間の遠きよつうれしとあり。扱大將八左衛門ハオシヤマンヘセ川の渡を。降人比乗たまし廿餘艘の船小打乗りて向へ渡。悉追討よして拾六人討取。此内

拾五人ハ此處より首を掛らきた。蝦夷比頭シチリチヤマエング首許を持セ。翌日クンヌイへ歸らきぬ。又クンヌイより手已けをし。權左衛門百三拾人許より。惣軍より二日程先より行。謀計を以て段々より手よつけちゝゲへしめ。其降人を案内者として猶深く押入る。以前の勘より見たり聞こりして。草の如くよ打なびく。残る四陣の人数も權左衛門の勢より續き後より行。沙流といふ所より至る。此處えぞの大將大勢居住して。シヤラセング居所撤退の纏より一日路の所なり。此所のえぞをも悉く權左衛門の手小にけて。撤退よ

至一里程前のヒヲタといふ所より。日本人金堀の居住する家。四五軒も有りし處より陣を取。撤退のえぞ共より早く來りて陣小屋をかけよ。さもなくハ壹人も生きじ。と權左衛門申遣しければ。元来臆病氣の付くる蝦夷どもなれバ。手々より木茅を持運び。そのまゝ小屋をあつらひしる。權左衛門其陣屋より入て。シヤラセン方へ使を立申遣やう。權左衛門是迄責入り。是迄の働き段々比様子をハ定て聞及びたるらん。そきとも戦等致べきや。但命をしくば是へ来るべし。命をば助け得さをべしと申遣したりければ。シヤラセニも始

の企とぞ違ひて大よ恐き。江戸より御勢比向ひたる
といふより聞怖して。早々夫へ參るべしと返答して。
人數六七拾人許召連。弓矢を持具足を着してエグリ
をバ腰よきし。濱邊比砂の上よ蹲踞して。シヤラセんを
是まで罷出たる由。使を以て申越せり。シヤラセんを
年八拾許よして。形甚大きく尋常の人哉。二三人一ツ
ふ致したる程のものなり。權左衛門此様子を見て。ト
マリ村の通詞。作兵衛を以てシヤラセんへ申遣やうハ。
降衆せを鎧を脱て弓矢を伏せてようるべきよ。甲冑
を帶して来る事こそ。甚奇怪慮外なれ。壹人も残らば

責殺をべし。早々歸り首よ刀を待べしと申遣したり
ければ。皆々鎧を脱弓矢を捨。權左衛門陣屋へ来る。そ
の時權左衛門脇差を取みて無腰よ成り立出て。えぞ
頭分けもの拾六人坐敷へよび入り。降衆の上ハ我等
其方共命を申請得さをべし。氣遣致事なうれとて。盃
を出して料理を振舞。さてシヤラセンよ向ひ權左衛
門云ける。汝が振舞傍若無人の至。不届千万小思召
子孫を申よ及ばば。徒黨のもの壹人も残らず。打殺べ
しと思召なれども。我等不便よ存る間。千色の償を出
きば命計をも申請て。とらすべしと申けまバ。シヤラ

セン命をだよも助りなばとて。千品比つぐのひと城
中よモ取寄せ。濱邊小次第小積せ置たり。エモシツボ
ウクワサキエモクタンホンムシツバ。等の彼國よて
此宝と見る所のもの千色比内。既み八百色請取てさ
わらバとて。彼ものども比命找助け歸城致されへき
小極りける處。歸をまじた方便よ。此間よ大將ハ左衛
門へ使を馳せて。早々人數御出し阿きと申遣し。叔權
左衛門シヤラセンよ申ハ。つぐれひ既よ八百色迄受
取たり。此上ハ最早和談も調ひたるといふものなり。
然らば悦び比酒たべよとて。金堀の小屋へ入。壹斗入

人

人

ア木ゴとハ彼國よてハ貴人比事を申なり

右のも比共を。金堀小屋よ残り居。外の者ハ皆城中へ
返し。皆々酒小給べ醉ひ。城中小醉卧したり。その内小
ハジカ、カテンク、マカノスケ、といふもの三人ハ。シヤ
ラセンよたぶらうさきて一味をあし。命よもかへし
どれもふ程のところもの出したきバ。彼と一坐をる
いいまくして。權左衛門陣屋よ残りてぞ居たり
ける。閏十月廿三日夜月比出る頃。八左衛門惣人數引

連て。金堀小屋を取まき申さきしよ。彼權左衛門小屋
小居残し。ハジカ、カテンク、マカノスケ三人比心ふ
れもふ。此小屋内百五拾人程なるよ。五百人の飯を焚
しゆゑ。心得がたしとて。飯焚よ尋けきバ。飯焚答てい
ふやう。和談相調ひしよ付。皆々よ振舞いとさる。苦
なりと答たきども。何とやら不審なる折ふしよ。惣人
數れ馬の轡の音よ驚き。飛出逃るをのがさじといし
めく内。はじめハ窓より逃出るマカノスケも生捕き。
カテンクも通詞比勘右衛門組伏て終よ首を取る。此
褒美よ權左衛門指領の脇差を。勘右衛門よ取らせけ

る。八左衛門よりも褒美賜りたり。御注進帳よも勘右
衛門勵の義戴せらきたる由申聞せられしより。マカ
ノスケも翌日切られ。シヤラセンゲ兄弟三人あり。シ
ヤラセンゲ次をチンテガイと云。その次をシラゲシ
と云なり。此シラゲシハ。乱氣ふて常よ狐付などの如
くなりしげ。此事を早くさとりて逃失たり。松大將八
左衛門引連らきたる惣人数。金堀比小屋を二重三重
よ取まれ。闘の聲を揚る。其中チンテガイ起ひびりて。
狂飛廻るしかども。何よても阿キ道具なけきバ叶ハ
ぞして討き。シヤラセンも起ひびりて。四方をきつと

見廻して。權左衛能くも我をたをかりて。きとなき振舞致したりとて。大音よ匂りて大地よどうと居て。手曳動さぞして討きたり。アホゴ共よ廿七人討取り。小屋小火をうけ焼拂ひ。シヤラセンをバ。ぞくく 小切て見きバ。常人とハ變みて。肉の厚き數寸何足しとなリ。勘右衛門も手ふ掛け切たりとなり。其後シヤラセンが居城へ押寄とりし小。同類比えぞども多くハ城の後へ逃失とり。残るものどもを焼殺し。大將八左衛門ハ惣人數をまとめて。五陣ともよ松前へ歸陣せらきしなり。然る處よまと残黨千人許り追かけあるを。

大筒を打うけ追拂ひたり。又彼仙北比庄太夫を此時召捕て。火河が里よ行ひれたり。又沙流とシコツの間よて頭立たるもの拾六人生捕。松前よ引渡し牢よ入置。扱同時西在郷の方へも。蛎崎小左衛門同采女五百餘人數よて向ひし處よ。威勢よ恐れ一戦よも及ばに。皆降參せる故歸したり。八左衛門兩年松前よ逗留せらき。蝦夷地取鎮め歸府せらきしなり。八左衛門子息三人并ハ左衛門。陣場を借請度願出て許可を蒙れり。浪人共大勢召連られしとなり。シヤラセンハ諸嶋を手よ付け。数万の人数より。されども其始商船北者

比寐首を搔きたる計りよて。クンヌイへ人數を出したるより滅亡よ至る迄。日本人を壹人も損せば。軍功遂られたり。オニベハ家来五六拾人程。ハイケル下手の人数合せて貳千許りなり。此時津輕家より侍大將壹人人數五六百相添後詰のため。松前より遣し置きし由。勘右衛門物語あり。是尤津輕家上意を蒙如此なり。亦松前渡海の節。三馬屋より庄右衛門と申七拾歳比老人の物語。津輕家右人數の外よも手分を立て人數遣を苦なり。松前と申合て。是ハ松前より加勢望まる。節狼煙を阿ぐる約束ゆゑ。津輕より彼濱手遠

見番を居られたり。南部家上意を蒙。加勢用意し差備らる。又江戸表へ注進比滯りなきため。其領主より一里よ一軒つゝ小屋をうけ。役人を差出置きとする事。夥うよしなり。仙臺國主南部筋へ向ける人數を出し差備らる。佐竹家城下押離き。人數差出し相備らる。其外此邊比諸藩上意を蒙如此。然きども松前手勢よて。不日よ退治せらきしなり。

右松前通詞勘右衛門口上の通を記す。勘右衛門ハ此一揆比節廿歳。佐藤權左衛門手よ付。諸事自見分せし由なり。蝦夷記

○國後乱初發の事

寛政元酉年東蝦夷地國後小於て。夷共騒動よ及ぶ。此起りを國後れし名サンキチといふ夷。ひさしく煩ひ打卧居たましげ。日頃好きの酒を望みし故。國後場所北内ムシリケシと云處。松前領より荷物改めとして竹田勘平といふもの相詰たる。飛彈屋久兵衛請負運上家有。是へ酒を貰ひよ出したる所。運上屋北番人酒代。またい時戯きていふよ。サンキチも最早この酒が。此世北呑納めなるべしなど云て渡したり。右北酒を病人サンキチよ呑せしよ。程なく息引とりたり。

右番人が戯きことを。使ふ行たる夷サンキチ弟マメキリといふものへ咄しけるよ。段々勘をつけ。おのらむ。是ハ定て毒酒なるべし。番人が言たる言葉といひ。日頃支配人番人等取扱よろし。うらざる故。恨居たる事なきハ種々比うとげひ邪智よ氣を廻し。いよ／＼毒酒よてころさきたることどうらみ。蝦夷仲間とかたらひ。酉年五月十日此事なるが。先國後運上屋へ大勢押込。鎗脇差其外よ物を携へみざれ入。荷物改竹田勘平をはじめ。支配人番人のこれら殺害し。厚岸、釧路よ至る迄。運上屋番人と日本人比分を打殺をべしと。

夫より所々へ乱入して大騒動及び所々にて人七
拾壹人を殺害したり。此時傳七、厚岸より夷ども六
七人召連き國後より居とりしが飯米なき故請取とし
て。夷どもをフルカマフといふ所へ遣しけれども歸
來らぞ飯米一粒もなけれバ困究迫り二日程ハ
路など食して凌ぎ居たり五月十日比事なるが壹人
淋しくまどろみ居たるし。夢ともなく現ともなく
丈の高き出家夢中より傳七を呼び起しけきども疲きた
る事故まことに居たる處右は出家再應呼起を
故夢さめあらならば起上りし所冲より夷船見ゆ

る故是も兼て遣したる夷どもフルカマフより飯米
廻し此舟ならんとおもへ共夫をむろへよ出るよも
空腹故精力あけれバ卧居たるし。其夷船いつも出
入比澗へもいらむして少し脇なる出崎陰へ澗取た
る様子よ見えし。程かく晝九ツ頃重立たる夷サン
キチ弟マメキリ先よ立て夷ども拾四五人番小屋比
うちへ押込其外及とのを携へ乱入マメキリ云ける
ハこの度國後乙名サンキチ病氣よ付勘平どもへ酒
もらひ度段申遣を所。呉らきたる故病人よ呑せたる
小夫を呑と程なく相果たり左をれば右酒へ毒を入

あるもの故。サンキチ相果たり。これよりつて勘平を
じめ番人まで残らば打殺したり。其外地方厚岸釧路
よ至るまで日本人の分ハことぐく殺害をるなり。
是よりつて其元とても道をべきふあらねば。今殺を
なり。覺悟阿キと云たり。その時傳七云ける。其趣意
ならバ助かるべたやうなし。あらし己れとい今をこ
しけ内命を助け置呉よ。厚岸之名イコトイハ一寸對
面して其上よりハいのやうとも心任せ小なるべし。
併勘平どのをじめ。運上屋通詞番人のこらば。殺害小
及ぶ上ハ。已きら壹人助のるべき様なき故存分よす

べしと云ければ。マメキリ尤じめ夷ども云ふ。左程
れ事あらば。イコトイ方より善惡とも揆摸の阿るま
でも。助置べしと云て。船比中より傳七弟吉兵衛と云
もの城。女夷脊負て来るをされば。足よかせをあけて
番小屋へ入置たり。扱マメキリ傳七よ向ひ云やう。そ
其方よ尊き佛像を所持有よし。かねぐ聞及ぶ處な
り。夫此方へ渡し申べしと。傳七日頃身城離さば。大切
よ信仰をる所也。貞傳和尚比作の阿みど如来厨子八
の尊像。甚秘藏を所といへども。一命よも替がさく
れもひ成程夫も望みよまのせ。フルカマフへのへり

たる上より。渡をべしと云ければ。マメキリまゝ云やう
ハ。其外より交易せ代ものものこれらを此方へとたをべ
しと云故。夫よりマメキリ同道より。フルカマフへ歸
ス。尊像其外米粕酒たを木綿小間物類。代呂物残ら
ば相渡しけき。夫を夷ども脊負てマメキリづ家へ
持運びたり。夫より傳七并弟吉兵衛兩人。厚岸比夷ど
も八九人乗組。飯米等積入フルカマフ出船。キナカイ
といふ所まで漕行ける。向より夷船より夷共大勢。
鎗多く建ならべ押のけ来るを見て。吉兵衛云ける。是
是迄ハ先死とのぞれたきども。何比如く夷共大勢押

のけ来る上を。逆も遁るべきやうなし。進退あらず。極
たりとて覺悟して居たを。少程なく間近くなれば。
厚岸の婆々なりと。聲々よ匂ひ參りし故。兩人も安堵
して。海上ながら聲をかえし。夫より両船とも押戻し
チタセといふ所へ着し。同所へ上り國後比様子マメ
キリケ始末等。一々物語しけき。夷ども落涙しぬ。此
厚岸の婆々といふ。トウフイヒ名。ツキノエといふ
るもの。妾みて。ツキノエこの騒動比節も。松前へ
味方なし。忠義を盡したる事。此末より記し置き。ツキ
ノエの蝦夷地より名高きものにて。家賊も多く持有

福比夷なり。妾も拾八人有て銘々家を分け。所々より住
せ置なり。當時年老たれども。一軀強勇なるものより。
夷どもこきを尊む事より。ウタレもれびたゞしくほ
るなり。ウタレといふより家来筋比ものと云事あり。扱
其日ハ滞船せし所。婆々が子どもニシコマツケと云
もの。是も婆々と一所より船より出しが。彼島ハ海陸裏
表より振分て道向き。ニシコマツケハ山越をして。右
チクニといふ所へ來り。双方落合たる節。始終の様子
をニシコマツケへ物語をしければ。且驚きあつ歎き
て同人申ける。定めておののくも殺されたる事と

存居たる故よ。たとへ打殺されたる事ありとも。死骸を
も取片付。其上よりマメキリ一同打果し。後又北く
も自害いたるべき了簡より來りたりと云ければ。傳
七谷て云。心底比ほど實小身より餘り過分なり。志のし
されくも最初死をのぞき。是迄来る上ハ夫よりも及
ぶまじ。先々打合等を思ひどより呉よと宥ける故。
漸得心し。夫よりニシコマツケ其外比夷ども大勢少
て。マメキリが居所フルカマフへ押寄。先より取らきた
る交易比代物等。取返し申べしとて別きたり。傳七吉
兵衛兩人ハチタセより相待居をし。程なくニシコマツ

ケを始め。夷どものこらび歸り來り。最初マヌキリより
とられとる尊像并交易代物等。取返し傳七へ已たし
あり。か様よにやふき大難を逃き。其上尊像も先に手
へ一旦渡しけきども。復傳七が手よ戻りし。全く尊
像の靈驗尊むべし。夫より翌日支度をなし。婆々其外
夷ども數多乗組出船せり。尤ニシコマツケハ山越して
戻りけり。そきより三日ほどをぎて國後島北をし。擇
捉嶋のあたり口迄行て。船よ逗留し。日和待合擇捉へ
渡す。其處より船路十日餘りみて。シヤナツといふ所
へゆき。之名イキトルアといふ夷よ逢。其所小厚岸北

乙名イコトイ居合。右のもれどもへも始終のやうを。
婆々并ニシコマツケなどの介抱よて危難をばづれ。
是迄來よし趣とも云聞けレバ。イコトイ始め大よ驚
け。トヨトイ殊よ立腹して。俄よ右島中へ觸を通し。此
度國後騒動よ付。傳七吉兵衛此處へ參り居れり。歸る
のせつ少人数よて危ふき故。警固のため人數手配
り。乗船支度等の事一統へ觸流し。夫より三四日過ウ
ルツブ嶋より夷船八艘よて。國後領トウフイ北乙名
ツキノエ。何心なく來りたる故。段々難澁せし事ども
物がとりしけきバ。ツキノエ是を聞て大よ後悔し。我

等其場所小居合たらば。左ほど人を殺さを甚じた
ものをと落涙して云へり。吉兵衛をば便船小て松前
へ送り。同所より二三日逗留し。イコトイ、ツキノエ傳七
三人打より相談より及び。此上ハ如何してあらるべき
やど。傳七發言しけきバ。イコトイ比言より。右一件より
付てハ松前より御吟味として定めて役人中御下り
仰るべし。其以前より此度徒黨せしものどもをムシリ
ケシヘ一所より集め置てハ。如何有べきやど云けきバ。
ツキノエも尤なりと同心したとへ我子セツハヤ壹
人与し居るとも苦しからず。右セツハヤとも同様より

どらへ置べしと云故。傳七云けるハ其元たちハ甚以
奇特成心体なり。其忠信比趣ハ異よ御上へ申上べく
なれば。隨分此節相励ミ申べしと云含め。其了簡なら
バ別心なき心底を志れたきども。此節の事あれハ別
心なしと云手印ふ。何品小ても多少よりらを差出し
申間敷やと云ければ。成程尤なりあらし途中比事故。
心當りもなし。持合たる獵鹿皮貳枚。鷺の真羽差出を
べしとて出しける故。傳七請取爲念書付認相渡し。翌
日ツキノエを船七八艘より擇捉より出帆し。其翌日
傳七イコトイ、ニシコマツケ、婆々其外擇捉比夷共大

勢。船拾七艘より同所出帆し。順風にて十日餘り比日
数少てタン子モイと云處へ着。夫より國後島へ可たり。
勿論ツキノエも其前より同所より着し。方便をもつて
徒黨したる夷共頭立るもの三拾八人。ノツカマフへ
集め置。松前より差向たる役人到着の上。ことしける
故。先明き小屋へ入置。隨分命ハ助くべき由を申聞せ
だまし置。一人づゝ呼出して首を刎ける。二三人きら
きてより。小家比内より不審をたて。是を皆々殺さる
事とをじめてあり。残り三拾人程は夷とも。小屋比
内より騒出し。大よ狂ひわめく故。甚もてあつうひ。已

おとを得ぞ。松前比役人小屋の廻りへ詰うけ。鉄炮を
もつて打殺し。其上より刎ある首を残らば松前へ持
歸り。獄門ふのけたりとなり。此度見分御用より付圖合
船比船のとふ。南部大畠より雇入庄藏と云もの。予が
松前より宗谷へ下る節乗合ある船より罷在るなり。此
庄藏も右騒動比節。キイタフへ松前より荷物積入相
廻しある。神通丸の水主より彼地へ至り。國後比海上
へ澗懸をして居たりし。マメキリ始め夷とも押寄。
船中乗合比者ども残らば鎗より突殺し。其節庄藏も
所々つられ鎗疵を受。其外惣身九ヶ所手負けり。死し

たる振をし息を殺して居たる内。船中比荷物等運び出し夷ども引取たり。其時庄藏起上にて。尤所々の鎗痴等いとみけれども漸く苦などかぶり居たりしよ。また／＼夷ども來り死骸を改め。庄藏が卧居たる所へ來り苦越しそ鎗を突たり。此時鎗も股へ當りけれども身動きもせば息を詰てあらへ居たる故。死しこりどれもひ夷共引取たり。此騒動は大勢夷ふ殺されたる内。危ふき命助のりたるも。傳七兄弟と。此庄藏をかりなり。此とび交易方御用下役格。長川仲右衛門といふもの。是も右騒動せつ。大船比船頭よて。右の國夷諺俗話

後へ船廻し居たりしづ騒動の前日夷共仲右衛門へ云やう。大概日和あらば。早々出帆有て志かるべしと度々云故。がてん比行ぬ事どハおもへども。何よても譯も有る事やと。支度して國後を出帆し松前へ歸要ける。右船の出帆の翌日。右比騒動みて有し由。今一日彼地より居なば命ふも及ぶ所。運比強き事なり。是も日頃夷ども小所よりよろしく。ふくまれざる故。やうよ夷共せつきて。出帆をさせたる事と見えあり。

○厚岸の酋長蝦夷を殺害せし事

異國の様子等ハ追而委細可申候得共。差當り急務御取締一ヶ條。左より奉申上候。

一厚岸酋長イコトイ義。居村比蝦夷を無故致殺害。擇捉嶋へ出奔致し。異國人へ服從罷在候處。當年國後嶋へ來候。扱亦釧路場所酋長タシヤニ比義ハ。當年同所の小蝦夷を殺害致し。其上厚岸場所根室場所斜里場所邊の酋長共へ申合。若落度より相成候。加入致し吳候様徒黨を結候段承候。然處當年ハ御制札御處置も有之。人を殺候者ハ死罪たるべしと。御觸御坐候上ハ等閑より難致候。依之死罪被仰付候。

節ハ。イコトイ義罪を恐て逃去。異國人へ加徒黨可社ハ瞭然の事と奉存候。當年蝦夷共氣請宜敷候ハバ。イコトイ、タシヤニ此兩人を御仕置被仰付可然奉存候へ共。一體氣請不宜且又厚岸根室斜里邊の者共。タシヤニへ一統仕候趣より相聞候得ハ。右兩人御仕置より相成。一圓より蝦夷共相叛候。後々服心比民より無之。異國の御不締より可相成奉存候。厚岸より國後迄の蝦夷共。御仁政より相服候ハ。城郭も均敷御事より御坐候得共。當年及承候様子よりハ誠より御大切の御事と奉存候。甚心痛罷在候義より御坐候。

聊存寄等も御坐候得共。恐多難申上奉存候。無遠慮
申上候様格別の御差免も被下候ワ。尚亦申上候
様可仕奉存候以上。

未十二月

最上 德内

平 美濃守様

最上常矩厚岸乱申上

○戦鬪の事

戰鬪之事。名曰車賴一革木利。多用夜攻出敵不意。蝦修妖術者。潛行入敵中能令人不覺。故毒箭或發茵席下。蝦夷之相戰。其法先遣使陣所以戰之始末。言皆用古言。音聲節調別有法。猶春秋之辭命也。若敵有不能解其言者。

則爲四方笑。古稱蝦夷能作五里霧。余意謂是無它。故蝦夷地固多深山平野。瘴氣凝結。恍忽之際不辨咫尺。因其常已畿内人不慣風土。故驚駭以爲妖術之所致耳。蝦夷風土記

○シヤラカムイ并トミの事

シヤラカムイといふ事ハ。蝦夷人とも口論小及び打合ふ節。双方よりあれ陣を立て。両陣よりメノコ岱出し使をたつ。かやうの使よハ女夷を出をう例のよし。口論比趣意を述其上よて打合をたどるなり。但し双方弓矢ハ用ひぞ。キチをもつて打合ふ事なり。尤

シヤラカムイより。運上屋支配人通詞取扱和談を入る事なれば。双方納得なき時よりで。此シヤラカムイを討るなり。且人數をくなき時ハ隣村相催し助勢を求る事なり。

又トミと云事阿モトミといふも。シヤラカムイよりハ大事にて戦なり。此時ハ双方の毒矢を用ふるあり。
夷諺俗話

○議論の事

議論を互に事理を盡し。一日よ決せば。一晝夜よ至る。互相議し精神耗るを負とも。蝦夷雜書

○境界論の事

有珠字瀧河^{ノカワ}比^ツほとり小蛇田土人の漁屋二軒有。其所ハむろし蛇田土人鹿を追來り。爰^ハて瀧^{カニ}落死せし時。蛇田の酋長サカナなる者。東西の名を得たるあきものなぞしが。有珠場^{ハシマ}をかくの如き瀧^{カニ}がある故。我^ハ僕死たり。其償^ハ此瀧^{カニ}を以^テ來我等方へ遣^スべしと云ふ。有珠比^ツ名答^{カタ}けらく。瀧^{カニ}ハ元より余^ハ領分^ハ物なる處へ來て落る共其方比^ツ過ちなりと答^{カタ}しなり。サカナ又云ナコ^{食鳥}エキフを見て追ふを土人比^ツ汰^{アハ}。依て追來しが惡^クい以來有珠比^ツ土人は鳥獸比駄

走るも比を喰ことなうきと。此談判よ勝て川越蛇田
へ取る。川口迄を入込比場所と定めぬとうや。東蝦夷

日記

○シレノアイノ強談の事

上川郡の役土人シレノアイノといふもの。或日山林
よ行し跡よて。其子川遊びよ出。いづ誤たるり卒よ
溺死せしを。同村の土人が彼山林よゆきて。有体のこ
とを報知を。あらゆるよ其親の心ざはよのらぬものな
れべ。答へていもくわう子の川よ溺死せし。全く村
の集て化物を出し。わう子をとらしめたるよ違ひな

し。今さら死をるもの。生かへる譯をなけれバ。詮方
なしといへども。化物を出したるあざの甚惡けれ
ば。その償として村中比寶物をとぞ集めて差出をう。
わが子をもとの如くよ生てかへもべし。左なくバ所
存のあり。此山林より歸村ハ致さずと云り。折柄この
役土人比今歸村せされば。叶をぬ事ありて。無據土人
ミなく。遺憾と思ひながら。聊の償を出して事濟せ
しと云。上川見聞奇談

○童夷議論の舊古をる事

上川郡土人セカチ某づ。宝ものとして秘藏しける漆

争乱

卷五

四十七

塗比盃臺を。

古來より土人比宝とすべき物ハ。鏡刀釦漆塗の器物等なり。此盃臺も七月より十月まで石狩役所へ雇役せらきて歸郡比節勘定比賃金より換へて持歸至しものなり。

何るアイノが見て頻々ふわづ物ふせんと欲をきども得るよよしなけきバおれグ妻と謀。よろしく企て密通比名をれあせて到底其償として彼盃臺を取揚し。彼セカチいのり小堪されども取戻比搆合ふ覺束なけきバ。晝夜涕泣してたゞムー

ムーとハ搆合の言規を誓古をる聲あり。常人ふハ何事も聞取うとし。

居り土人を渾てこの誓古をべしと根室及國後邊みても是をウカリ比誓古と云。同上

○蝦夷人仇を忘れざるの事

夷人もし口論など小れよびし時。汝が父を斯比ひときことりとて親のりした事を相手方よりいふ時より大ひ小恥入りて口を閉赤面をる風。時より誤りあつて他人よかれ槌打ふせらるゝ事ある。つぐのひよてもとらきし事有夷人を生涯忘ること

なく。子々孫々ふもいひ傳へて。其相手ふせし夷比家
よ誤り有時ハ必らば仇をうへを事なり。如斯比風俗
ゆゑ互よ誤りなきやう小慎しむあり。東遊雜記

○和人蝦夷ど爭論の事

東夷周覽稿。山越内と云る所は支配人を。茂左衛門
と云。頗エ智有るもの。而夷人。彼ひくともよく。近
場所。みならびなきもの。あり。或時他場所の夷人。山越
内へ來りて。夷人を捕へて云やう。近き頃我父死せり。
父。死せる病根と云ハ。十年以前汝我父を拳打せし
ゆゑ。其瘡瘍疾とありて終ニ死ニ至き。汝我父。敵

なり。こき小依て償を出モベシ。もし出さぞんバメツ
カウチをなさんと云。山越内は夷人これを聞て。恐き
て彼の聞ゆる力量。何るものなき。我若彼とメツカ
ウチをなさば。打殺されんハ必定ありとて。さまく
詞を盡して詫けきども。他場所は夷人更に聞納す。頻
よ罵り恥しめけき。せんか。なく茂左衛門が方小
來り。斯と訟へけき。茂左衛門聞て他場所の夷人ふ
向ひて云やう。汝がいふ所理。然きども十年も以
前。ふ撲たる事なき。誰壹人も證據となるべきもの
かし。されども人命ハ人倫。尤重しどきる處なし。

其事疑ひなきよ於てハ。此方比夷人よ償を出さをべし。汝が言ヒ如く十年以前よ撲たる金瘡病根となり。死せし程ならバ。今よ其金瘡のるべし。さへらバ汝が父比墓を鑿て。死骸を檢屍を遂たる上より。其詞よ違こと何らぞん。償を出さをべしといふ。他場所の夷人答ていふ。其事よ於てを決して致しがたきことなり。此國の法として一たび埋めたる所比死骸を再び鑿出をことを堅く致しがときことなり。夫より勝きる證據あり。近頃メノコを以て占せしむる所よ必定彼ヶ撲ちし金瘡病根となりたるよ疑ひなしこ云。

然らば是よ勝きる證據何らじといふ。茂左衛門聞てさほどたしかなる證據何らん。よも相違も有まじけれども。我いきゝ思ふ子細にきば。彼のメノコを伴ひ来るべし。我自ら問て事を決せんといふ。他場所比夷人諾して彼メノコを誘ひ来る。茂左衛門問て云。何某が父比死せるハ。此方比夷人が撲し金瘡病根どありて死せりと。汝占ひしやと問ふ。メノコ答て云。如何よも彼ヶ言ふ違ひなしといふ。茂左衛門聞て誠よ汝も占は妙所を得たるものか。かほどたしのよ申を上う。敢て疑ふべきよ何らざりど。我もまと

汝よ占なむしむることあり。能占得ハ償を出さばべし。若占得ぞんべ償を出そまじといふよ。兩人も尤ど同じ。扱茂左衛門一ツ比箱を持出問て云。この内の品を何なるやらん占ふべしと云ふ。メノコ何やらん口れうちよ。咒文を唱へ暫く考へて云。この内なるもの紙なるべしといふ。茂左衛門冷笑て彼箱の蓋を取りバ。三四尺の木綿切を入置けり。茂左衛門彼等は対していふやう。汝等十年以上の事を以て占をなし證とぞれども。今眼前よ一つの篋中さへ探得ぞして。何ぞ十年以前をあること找得んやといへば。兩人も當

然は理よ。詮方なく屈服して退きたりといふ。かる
愚鈍ハ所よそら狡黠なるものあり。茂左衛門が少しく
く才智を以て事なく平理せるハ面白き物語なり。千
島志料

東遊記よ。蝦夷人道理哉いひつのよ。道理よ負たる方
より勝たるものへものを取。是哉償といふ。是小つき
てをのしき事あり。日本人は船よ蝦夷は小船哉附け
て居たり。日本人誤て其船へ小便をしけきバ。腹立て
さまぐ。你だりけるを。小便よもあらば水をあほし
たるなりと。欺けきども中々得心せば。前世ものを見

たりといふ。其時日本人望は如く物を払うとして後
いひける。人の隠をところを見る事至て無禮あり。
此罪いふもするぞと詔だりあへしけば。蝦夷人
こまうて取たる償戻又添となして。償せどられたり
といふ。或も蝦夷は家へ用ひりて行けり。家居近くな
りて其蝦夷向より来る。そこへ行なりといへを。志を
し按する躰よて。何とぞ歸りくれよといふ。日本人意
地悪く行むといふ。是非なく家へ伴ひ行ければ。蝦夷
の妻臨産よて子を産處へ連行たり。夫婦とも少いた
く恨て。うく恥しきめを見るふ。心うしとて償を詔

だる。其時日本人まといふやう償を出そべし。日本よ
て産穢ふふるゝ事至て忌事なり。産所らばなど其譯
をいそばして。我を伴ひて穢ふさせたる。此罪も
いふもするぞといひける。其理ふをきてまと償を
とらきたりといへ。まゝあるもの蝦夷が父死した
るが墓所へ小便したり。蝦夷大よ怒り例比償を出そ
小成ける時。日本人いふやう。墓よてもなれを墓なり
と我を欺く成べし。墓戻堀て死骸を見むといひけれ
を。蝦夷大よ恐きてさぬ／＼詫けれども。日本人承引
せむ。多くは償を取たりと語るもの。蝦夷人を道

理みつまりぬきを。強てほらがふ事ならず。忽ち首をたきて誤りいるなり。これ正直なるゆゑなり。同上

○もづ打の事

打るゝもの。三尺手拭の両端を両手みて首小掛け。肩をぬぎてせ間許とも先より聲をうけ。小をどきして廻りながらもづみて打るもの。其跡よりもづを振上げ。是又同く小をどりをして多くみ出。氣の十分み満る節。打るゝもの足を踏み違へ。請身み成て立留り。又外れもの。打るゝもの。前み踏違へて立。打るゝ者の両臂をとらへて。そのひたらみのてとらまふ。如此

みせされば打倒されるよし。其時打者のしかゝりて十分み打。其勢ひ筆小盡し難き能き見物なり。痛まざる様みと斷るゆゑ。もづき布みて能くまたれくなり。彼國みて罪人向きバ。大勢集みて科の輕重み依て。打数の多少もゐるよしなり。又いさくふ時ももづみて打らふよしなり。小勢なる方ほらそひまける時。つぐれひを出し。ひ見るより。ケ様れ折らふ。めのあしも側より聲をうけて力を添へ。打るゝ人の顔へ水などそぐなり。打様みて脊をも打破り。絶入をかりみものるよしあり。さるみ依て幼年頃より打様

をも請様をも。數年修業を専ら。致をよし。皮を
脊。懸け。請習ふよし。痛むとも。打殺さぬ様の手心
を。藝の第一として。練習をといへり。蝦夷記

蝦夷風俗彙纂前編卷五終

